

# 交通 評論



ウォーキングが静かなブームらしい。不況の折から最も安価なスポーツである。手軽にはじめられ、ダイエットにもなる。1駅歩いて交通費を浮かすこともできる。よいことだらけのように始めてみた。新しい携帯電話には万歩計機能が付いていて、身長、体重、歩幅を入力すると、「貴女は今日何キロメートル歩きました」と教えてくれる。最近では毎日3〜4キロ歩いている。これは当然のことながら水平距離である。

ここでちょっと視点を交えて、もし垂直に歩いたらどうなるか考えてみよう。荒唐無稽な話だが、思考実験にお付き合い願いたい。

1キロ歩くとする。まだ地表の影響を受けた少し汚れた

空気を吸いながら、およそ6度ほど気温が低くなって夏なら快適だろう。2キロに達すると、12度下がり、風が強くなる。上着を一枚増やそう。きれいな空気を吸うことができるが、空気の量は80%、少し息苦しいかもしれない。3キロまで頑張るとますます風が強くなり、寒くなる。分厚いコートが必要である。空気は澄んでいるが、70%で、ゆっくり歩かなければ息切れがする。4キロではますます寒く、息苦しく、強い風を受けてあえぎながら歩くことになり、春先なら、遠くから黄砂が飛んでくるかもしれない。薄い大気の中を汚染物質は強い風に乗って遠くから飛んでくるだろう。このような場所を大気化学者は

「自由対流圏」と呼んでいる。

最近、温室効果気体、オキシタンなど大気中の微量気体の増加が問題になっている。環境省中心の国内外の多くの地点のデータから明らかで、地道な観測が積み上げられている。それはそれとして大切である

## 富士山頂の利用法

土器屋 由紀子

が、ここで提案したいのは、地表付近ではなく、地上3〜4キロの観測である。汚染物質は遠くから強い風によって自由対流圏を運ばれてくる。通常は航空機を使って観測しているが莫大な経費が必要で、天気のよいときしか飛べない。そのうえ、留まって連続観測はできない。データの少な

い領域である。

これを補完するために、山岳の利用が世界的に注目されている。経済発展の著しい中国とインドによる大気汚染を予想したEJはネパールのクンブー溪谷の標高5・1キロにソーラーパネルのピラミッド型観測所を設立、台湾も2・6キロの鹿

林山頂で2008年から連続観測をしている。海外の研究者たちから富士山でもやれと言われ

る。富士山レーダーが不用になり、2004年に無人化された測候所は、自由対流圏観測の絶好の地点である。スマートな独立峰なので、前述の垂直歩行のような状態に限りなく近い。そこで、仲間たちと集まりNPO法人「富士山測候所を活用する会」を設立、

気象庁から庁舎を借り受けて夏季のみの設営を行い3年目になる。夏季だけしか運営できないのは資金難のためである。公的援助はなく、競争的研究費と会員の努力で細々と続けているが、本来、国家事業であるべきこのような仕事を、研究者が慣れないNPO活動として行なっていることは知られているだろうか。

「富士山頂で、〇月×日、△時、汚染物質の高濃度を観測した」と発表できれば、近傍に汚染源がなく自由対流圏に直立した3776級のタワーのような富士山のデータは世界的にもインパクトを持つのではないかと。ちょっとした外交カードにもなるかもしれない。毎日水平に4キロほど歩いてNPO事務局へ通いながら、賛同者を募りたいと考えている。

(江戸川大学名誉教授・元気象大学校教授)